

一 般 演 題

1. もやもや病患者における局所脳血管反応性について

石田麻里子	松本 昌泰	清家裕次郎
鎌田 武信		(阪大・一内)
奥 直彦	森脇 博	橋川 一雄
植原 敏勇		(同・放)
板垣 裕輔	小高 隆平	永井利三郎
		(同・小児)
藤田 昌宏	西村 恒彦	(同・トレーサ)

[目的] ^{123}I -IMP split dose 法による非侵襲的脳循環予備能定量測定法を用いてもやもや病患者の局所脳循環予備能を検討した。[対象] 一過性の虚血症状で発症した小児型もやもや病患者 12 例 (平均年齢 12.0 ± 9.6 歳)。[方法] 約 1 時間の dynamic SPECT 収集の開始と同時に 1 回目の IMP を静注した。SPECT 収集開始後約 8 分後に Diamox (20 mg/体重 kg) を静注し、SPECT 収集の開始後約 24 分後に 2 回目の IMP を同量追加静注した。得られた dynamic SPECT 再構成画像より subtraction 法を用いて安静時と Diamox 負荷時の 2 回の脳血流像を得た。投与量補正、成人脳血管障害例にて動脈採血法と比較して求めた回帰直線式を用いて脳血流増加率を求めた。[結果] Diamox による平均血流増加率は小脳半球 21% や後頭葉 22% に比べ前頭葉 11%、側頭葉 14% と低下を認め、小脳においても 54% の症例で血流増加率の低下を認めた。小脳を基準として視覚的に脳循環予備能低下と判定した症例の割合は、1) 安静時 SPECT 像にて、前頭葉 46%、側頭葉 38%、後頭葉 23%、2) Diamox 負荷像にて、前頭葉 62%、側頭葉 54%、後頭葉 38%、であったのに対して、本法により Diamox による血流増加率低下と判定された割合は、前頭葉 85%、側頭葉 92%、後頭葉 61% であった。[結語] もやもや病においては、小脳や後頭葉などの椎骨脳底動脈領域においても、約半数の症例において脳循環予備能の低下が存在することが示唆された。 ^{123}I -IMP split dose 法は、非侵襲的に脳循環予備能定量評価を可能とし、もやもや病患者の脳循環動態の評価に有用であった。

2. ^{123}I -IMP Diamox 負荷 SPECT にて椎骨脳底動脈系の循環予備能の低下を認めた 1 例

恵谷 秀紀	蘭牟田直彦	八木田佳樹
加藤 洋二	中 真砂士	木下 直和
額田 忠篤		(国立大阪南病院・循・臨研)
山口 浩司	福田 進	松岡 利幸
		(同・放)

Diamox (Acetazolamide) 負荷脳血流 SPECT は 1986 年 Vostrup の報告以来、脳循環予備能の評価に用いられているが、そのほとんどすべてが内頸動脈系 (テント上) に関する報告であり、椎骨脳底動脈系 (テント下) についての報告はきわめてまれである。今回 ^{123}I -IMP Diamox 負荷脳血流 SPECT にて椎骨脳底動脈系の循環予備能の低下を認めた症例を経験したので報告する。

症例は 61 歳、男性である。めまい、嘔吐にて他院入院。入院中一過性の複視を認めたため精査のため当院へ入院となる。入院時神経学的には側方視にて水平性眼振と体幹失調を認めた。X 線 CT では異常を認めず、MRI では左後下小脳動脈領域の小脳梗塞を認めた。血管造影では左椎骨動脈起始部および右椎骨動脈 (V_4) にて閉塞を認めた。安静時 ^{123}I -IMP SPECT では明らかな低血流は認めなかったが、Diamox 負荷時では安静時に比べ小脳での血流がテント上 (大脳) に比べ著明に低下しており、椎骨脳底動脈系の循環予備能の低下が示唆された。

頸動脈病変については臨床症状、血管造影所見だけでなく、SPECT などによる循環予備能の評価を参考に血行再建が行われているが、椎骨脳底動脈系病変についても同様に Diamox 負荷 SPECT による循環予備能を評価したうえで血行再建の適応を判断する必要があると考える。